

斗牛といふ言葉

京城 大山 督

かの有名な宋の學者、蘇東坡の前赤壁之賦の始めの方の一節に、

月出於東山之上。徘徊於斗牛之間。白露橫江。水光接天。

と書いてあります。夏は七月の半ば過ぎ、日輪靜かに崑崙の彼方に沈みゆく黄昏時、今の湖北省附近で、悠久莊嚴なる大自然の雰圍氣に浸り乍ら、親しい友と唯二人、千古を流るるあの楊子江の波間に小舟を泛べて楽しく遊んだ折りの彼等の梯影、幽遠なる四圍の風光等が、この一節をよむとき、髣髴として私達の眸底に浮び上つてくるではありませんか。そして何だか、かう自分達迄が、この時の其大自然の中に溶け込んでゆく様な恍惚をこの文章から感ずるではありませんか。

が併し、この文章の中の斗牛の間を徘徊すといふその斗牛の間とは一體、天の如何なる方角を指して云つて居るのでせうか。且その斗牛とは如何なる星々を名指したものののでせうか。

それに付いて、色々さぐさぐさの受験參考書類やら、國漢簡易辭典類やら、扱は随分さ御高名な博士達のお作りになつた漢和大辭典等の類ひを一々調べて見ました所、一、二種の例外を除くの外は大抵どれもこれも皆一樣に、

「それは北斗と牽牛である」といふ解釋を下してあります。又、諸學校のその道の先生達に御伺ひ致しましても、特別の方(天文をおやりになつた方)でない限りやはり皆御一樣に同じ事を教へて下さいます。果して然らば、それは北斗と牽牛なので御座いませうか。北斗と牽牛との間を七月半ばのお月様が徘徊したので御座いませうか。

この事を考へる前に、先づ北斗の位置といふものに付いて調べて見ませう。

既に皆さんも知つて居られる通り、この北斗といふのは常に見掛け上、北極星を中心として、北方の空を廻つて居る所の著しい柄杓形をなした七つ星から成つて居るのでありまして、一般に北斗七星と呼ばれて居るのが即ち是れで御座います。そして是等の星々は一年中北天に輝いて居て、私達星覗き者の眼を喜ばせて呉れます。次に牽牛はと申しますと、これは、天の河の流れの、夏ならばその天頂からはやや少し南に距つた左側の岸に皎々たる青白光を放つて居る所の所謂鰲座の主星で、一等星であります。

扱て、北斗と牽牛との各々の位置は大體判りましたが、然らばそれ等の相互間にある星々はと申しますと、北斗の方から數へて見ますのに、先づあの蛭々

たる長軀をのた打ちくねらして居る龍座があり、ついで七夕で牽牛と夫婦になつた優しい織姫の琴座があり、次に天の河を翔けつて居るころの美しい白鳥星座があります。

そして、學校の先生達や、辭引の博士達にお伺ひするに、お月様がこれ等の諸星座間を徘徊するに仰言います。つまり、北斗と牽牛との間ですね、あそこを徘徊するに仰言るので御座います。

だが皆さん。あのお月様は私達地球の愛すべき子星なのです。ですから無論云ふ迄もない事です、お日様を本家本元とする私達の一族であらねばなりません。

で、私達の一族であつて見れば、決して、私達一族の旅行したり、遊んだりする世界を忘れる筈がないではありませんか。私達一族の遊ぶべき世界即ち黃道といふ道を忘れて飛び出したりする筈がないではありませんか。この地上には往々にして自分の遊び場所を忘れて、外の所の邪魔をしたり自分の踏むべき道を誤つたりする不心得者がありますが、嬉しいここには天界にはそんな人(?)は一人も居ないのです。皆各自が眞面目に、正直に、自分の遊ぶべき旅行の世界を運行してくれます。即ち黃道から、さう遠く離れることなしに其美しさを輝かしてくれるのです。況してや、お月様は私達地球の信すべき唯一人の子星ではありませんか。誓つて遁け出すなんて云ふ不心得は致させません。

斯う申しますに、「それでも蘇東坡が赤壁で遊んだのはもう何百年も昔の事ではないか。して見れば、その頃の月は或は北斗と牽牛との間を徘徊して居たのかも知れないではないか」に仰言の方があるかも知れません。

成程如何にも、一應御尤もです。が併し、それは、お月様の運行、否凡ての天體の運行の變化といふものが、唯千年やそらの年月では、仲々以て殆ど分りかねる程、否全く分らない位に微弱なものであるに云ふことを御存じでないから、仰言れるのでは無からふかと思ひます。考へても御覽なさい。天は悠久で御座います。時は永遠で御座います。たゞへ私達から見た一千年が如何程永い年月で御座いませうとも、それを宇宙から見ます時は、殆ど一瞬にも等しい、否それよりももつともつと短かい時間に過ぎないのでから、お月様がそれ位の年月に運行する軌道といふものは、宛も線路を走る汽車が、それに特別の工事が加へられない限り常に晷々一定であると同様に確かで、そして狂ひのないものなのです。ですから、蘇東坡が何百年か前に仰いだ時のお月様の通路も今日私達が仰いで居るお月様の通路も先づ同じであるといふ事が出来るのです。それは同じく黃道から遠ざからずに運行して居るに云ふ事が出来るのです。

では、黃道とは何かと申しますに、それは云ふ迄もなく私達地球の軌道面の擴がり、假りに圓いものだと思像した天の球に交つた所の線で御座いまして天頂と、南地平線との中間所、俗に所謂南天を過つて、東の地平から西の地平

へかけて走つて居るので御座います。（勿論季節により幾分の高低はありますが）繰返して申す様ですが、お月様はこの黄道から遠く離れて運行するご云ふ様なことは決してないのであります。

そうしますと、肝心の斗牛さいふ言葉は何を謂つて居るのか。さいふ結論になつて参りませう。

………確か天界の三十五號だつたと思ひます。名譽會員の水野三仰言る先生の天文雑話に申しますのに、詳しく御説明が御座いました通り、この斗牛の斗は支那の二十八宿の一つ、斗宿を指して云つたのであつて、その牛の方は、これも二十八宿の一つ、牛宿を云つて居るのです。

即ち、斗宿は今日の射手座であり、牛宿は今日の山羊座であつて、共に、黄道の星座に屬し、各々その九番目と十番目に當つて居ります。

以上述べたことに依つて、私達は、「お月様は黄道を通るのであるから、是等黄道の二星座間、即ち斗牛の間を徘徊するさいふ理論上の事實が實際立派に有り得るこゝである。」さいふこゝが判りました。

で、次に、少しく、季節の問題と時刻の関係について考へて見ませう。

蘇東坡が赤壁に舟を泛べたのは、七月既望だとしてありますから、當今で謂へば、丁度九月の始め頃に當るわけです。ですからその夜には、この二星座の中、射手座だけは、唯今の南中時刻や其日にち等から察しましても、確かに、日が暮れるごから既に南天に當つてチラチラと瞬いて居たに違ひありません。そこに、十六夜のお月様が東の山から顔を出した。續いて山羊座が瞬き始めたさいふ順序になるわけですから、その晩、お月様がこの二星座間即ち斗牛の間を徘徊して居たさいふこゝは最早何人ご雖も疑ふべからざる事實では御座いませんか。お月様は、確かに、間違なく、今から何百年かの昔、蘇東坡が舟を泛べた七月の十六夜、射手座と山羊座との間に冴へ渡つて居たのです。

皆さん考へても御覽なさい。

一體、何時、何處の國に、鵲の渡せる橋にのつかつたお月様を見た人が御座いませう。何時、一體、織姫の愛琴を盗んだお月様を見た人が御座いませう。何處の世界に、あの大熊なんかに會ひにゆかうとしたお月様を見た人が御座いませう。お月様は、可愛い可愛い私達地球の子星ではありませんか。さうして、そんな途微もない所に、聞くも嫌やらしい遁けたり、盗んだり、會ひに行つたりするやうなこゝが御座いませう。余程ヘンチクリンな眼を持つた方でない限り、迷ひ子になつたお月様が北斗と牽牛との間を行つたり來たりして居る姿なんて、見度くたつて見られはしない筈ではありませんか。蘇東坡は宋代でも有名な一流の大學者です。二十八宿位知らない理由は斷じてありません。ですから、斗牛の間が北斗と牽牛の間だにご云ふ人があつたら、その人は明らかに、千古不朽の名文たる東坡の赤壁の賦を冒瀆するものです。

皆さん。私は皆さんの親愛なる星の友達で御座います。御一緒に、ひろく天文を普及し、旁ら辭引博士をやつつけて、こんな事を間違へる様な人が、やがてはこの日本にだけでも一人も居なくなる様に、奮闘努力致さうではありませんか。私の話はこれ丈です。(をほり)

星の光り

それは單なる光りの點々である。形ちも無く、大きさも無い。たゞ微かな光りの、無茶苦茶な配列。——それが何故に此れほど人の心を惹きつけるのだろうか。

私は、時々、四條通りや寺町あたりの賑やかな夜の街頭を散歩する。はればれしい人の顔を迎える店々の電飾や、軒々に配列する燈火が、或は青く赤く或は白く黄いろく、一直線に列んだり、まるく輪を作つたり、人の智恵で考へられるだけの技巧をつくして光りを美化してゐる。——此の光りの海にたゞよう心で私は歩みを運ぶことが多い。しかし、其の時、幸ひに空が晴れてゐるならば、かうした人造光波と共に、天には星の光りが馴じみ深くまたゝいてゐる。私は、空を仰いで此の星の光りを捕へる瞬間心は平靜に歸つて、人造美と宇宙美とのコントラストに思ひふける。

人造の美は騒々しい、人造の美は靜かである。人造美は毒々しい、宇宙美は清く澄んでゐる。人造美は赤と黄とが勝つてゐる。宇宙美は白と青とが基調となつてゐる。人造美は當てつけがましい直線と曲線とで出来てゐる、宇宙美は無茶苦茶な列び方の中に實は誰でも考へさせる味を持つてゐる。人造美は材料が餘り多過ぎて技巧が足りない、宇宙美は簡単な基本材料であるが技巧は全く超越的である。——こゝろみに、暗夜街頭に立つて、有田ドラックの電飾と、春の中天にきらめく獅子の星座と見比べて見るが好い。人と超人との心理の差が最も端的に了解される。

もつと此のコントラストをまさにも見るために、晴れた夜比叡の山頭に登つて見るが好い。脚下に見る京洛の夜の賑はひは、かうした觀察の未経験者には到底想像の出来ないほど興奮的なものである。しかし、一旦、眼を轉じて全天に列ぶ大小の星座を顧みるさき、そこには興奮が無くて落付きがあり、動搖が無くて規則正しい運行があり、淺薄がなくて奥深かさがあり、いやみが無くて何時までも見る人の眼を離させない魅力がある。

先年、比叡上に登つて人の世と天の世界とを鳥瞰した私は、一九二三年、南カリフォルニアのキルソン山に登つて全く同じ感じを深めたことがある。キルソン山の下には、半世紀の間に一寒村から人口百萬の都會に化したロス・アンゲレスと、米國第一の富豪別荘市街パサデナがある。山の上から見下す此等の市々の美は、金に飽かし、人智に飽かしたヤンキー式の豪勢ぶりを見せてはゐるが、しかし智恵無しに造られた星々の配列美には遠く及ばないと思はせられた。——山本一清(雜草苑)